

対談集

文学と思想

江藤淳

吉本隆明

安部公房

三島由紀夫

野間宏

高橋和巳

安岡章太郎

大江健三郎

小田実

開高健

石原慎太郎

山崎正和

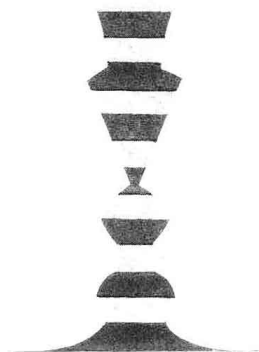
武田泰淳

小島信夫

森有正

木下順二





対談集

文学と思想

江藤淳：吉本隆明

安部公房：三島由紀夫

野間宏：高橋和巳

安岡章太郎：大江健三郎

小田実：開高健

石原慎太郎：山崎正和

武田泰淳：小島信夫

森有正：木下順二

河出書房

対談集 文学と思想

定価五八〇円

昭和四十二年七月二十日 初版発行
昭和四十五年十二月十五日 六版発行

著者代表 江 藤 淳

発行者 中 島 隆 之

印刷者 多 田 基

発行所 株式会社 河出書房新社

東京都千代田区神田小川町三ノ六

振替 東京 一〇八〇二

電話 東京 (二九二) 三七一一

目次

江藤 淳

吉本隆明

*

文学と思想：7

安部公房

三島由紀夫

*

二十世紀の文学：51

野間宏

高橋和巳

*

現代文学の起点：83

安岡章太郎

大江健三郎

*

われわれはなぜ書くか：129

小田実

開高健

*

叛くアメリカ・沈むヨーロッパ：
177

石原慎太郎

山崎正和

*

現代における「劇」とは何か：
209

武田泰淳

小島信夫

*

作家は何を見るか：
243

森有正

木下順二

*

日本語：
269

装幀 小松慶司郎

対談集

文学と思想

文学と思想

吉本隆明



江藤淳

外側から見た日本文化

江藤 この前にお会いしたのは、六年ぐらい前でしたか。

吉本 「自由」の座談会でしたか、平野さん、竹山さん、林健太郎さんなんかと……

江藤 山の上ホテルでしたかね。戦争責任の問題でしたね。

吉本 そういう問題でしたね。江藤さんは、いまの「文学界」の連載はいつごろまでですか。結局、徳川時代は全部やってしまいうわけですか。

江藤 そうしたいと思っています。

吉本 今回のはまだ見てないのですが、前のまでは見ているのです。近松をやっていますね。

江藤 はい。さしあたって一年間連載する約束ですが、それでは終わらないので、ひと休みしてまたつづけたいと思っています。硬文学のほうまで手をひろげてしまったので、なおさら長くなりました。

吉本 そうすると、あとは宣長とか徂徠とか、そういうのも取り上げるわけですか。

江藤 そのつもりです。仁斎にもできればふれたいと思っています。私が少し詳しくやってみたいのは天明以後、秩序の枠組が完成されたなかでおこった文学です。逍遙以来どちらかというと馬鹿にされているやつですね。洒落本、滑稽本、人情本、ことに読本はおもしろいと思うのです。

近代小説の問題に通じるものがありますから。ただ、これを本当にやるにはどうしても中国のことをよく知らなければならぬ。とくに洒落本などは、中国の遊里小説の反映でしょう。ところがこの原本は白話で書いてあるからとても私には読めません。漢文もよく読めなくて四苦八苦しているのですから。これから少し中国人の友人に教えを請おうかと思っています。吉本さんは『言語にとつて美とはなにか』という大作を完成されたところだけれども、私は入口でうろろしています。

吉本 たいへんなところですね。僕がおもしろいと思っているのは、なんというのかな、亀井勝一郎さんも同時に「文学界」に『日本人の精神史研究』をやっておられるでしょう。亀井さんの場合は、日本の知識人として、なんか外来の文化が、どうぶつつかって、どうなっているかということが、問題になっているわけだけれども、江藤さんの場

合には、なんというか、見るべからざるものを見てしまったというか、ヨーロッパ、あるいはアメリカを見てしまったものの悲哀みたいなものがあるわけですね。

江藤 ああ、ああ……悲哀ね。(笑)

吉本 そこがおもしろいですね。そういう観点がね。外から日本というのを見たら、どういうふうに見えるかという観点は、僕らにはわからないわけですし、またある意味では、故意に無視するところがあります。故意にそういうところはないと言いきるところがあるでしょう。ところがいったん見てしまったらどういうふうになるのか。江藤さんの論には見てしまつてから、ここにはなにかあるという、そういう悲哀のごときものが感じられて……(笑) 亀井さんなんかのパターンは、要するに近代主義的な日本のパターンだけれども、そういうのじゃなくて、外から見た場合どういうふうに見えるかというところで問題が出ているのが、ものすごくおもしろいですね。

江藤 そうですか。それは非常に正確な観察かも知れません。

吉本 あなたの『アメリカと「私」』にも、それを感じたのですがね。僕は江藤さんが安保闘争を契機として変わったというようなことは、信じていますよ。それよりも外を見てしまったという、外から日本を見てしまったという

それがアメリカに行つてからあとの問題なんじゃないかというような感じがしているのですが、どうですかね。

江藤 外国にいて自分がどう変わったかは自分ではよくわかりませんが、外から見てしまったものの悲哀があるとおっしゃるのは思いあたるような気がします。外国人の日本文学研究は玉石混淆ですが、虚心に読んでみると、なかには虚を突かれるものがある。外国人の日本研究のなかで、なんといいてもいちばん重量感のあるものは、サンソムの日本史でしょう。これなどを見ると、日本というものの形が、外から書いているために、見えすぎるほど見えていて、いやになるほどはつきり浮き上つて来るのですね。そういうのを読んでいますと、感嘆するのだけれど同時に妙な表現をつかえば凌辱されているような感じもするのだな。サンソムという人は、この間亡くなりましたが、非常に余裕のある人で、しかも日本文化に対する愛情も尊敬もある人です。しかもこの人は、本職の学者ではなくて外交官あがりの素人ですから、なおさら偉いと思うのですが、サンソムのように、われわれが読んでいて気持ちのいい歴史家の仕事でも、日本の形が外側からとらえられているのを見ると、なんだか凌辱されているような気もするのだな。その反作用として、貞操を守りたいような気持ちが起きてくる。それを悲哀といつていいのかも知れません。

吉本　そういう問題ですね。

江藤　現実の問題として、僕はやはり日本文化はもう外側からの視線を浴びせられてしまったと思う。自分が生娘を守り通していると考えるのは、幻想だと思う。もう女になつてしまつてゐるのです。それなら女になつてしまつた者がそれにもかかわらず、自己を主張しようとすればどういふことになるのか。日本文化の特質といつてなにかあるのかといつて、いちいち実証的に検討し直して行くと、えてしてザルで水をすくうようなことになつてしまふ。

日本人はとくにこの問題を深刻に考えるのだからと思う。もしヨーロッパ人が、ヨーロッパ文化の特質という問題を深刻に考えるなら、たとえば科学はアラビアに行き、宗教は中近東に行くといふような形で、いろいろなものが抜け落ちてしまふに違ひない。その結果、ゲルマンの森のなかでウロウロしてゐた蕃族が残るといふことになるかも知れません。しかし彼らの文化は今日普遍的な文化の代名詞になつてゐるので、このことを深刻に考えなくても済むのですね。

日本人はかつて東西文化の融合といふようなことを言つたが、けつしてうまくいつてはいない。いろんな点で、吉本さんのよく言われることですが、土着的なものと近代的・西洋的なものの間にヒズミが生れてゐます。これを良心的

に腑分けしようとするれば、どうしても剣ガ峰に押しつめられる。全くむずかしいのです。

吉本　そうですね。そういうことは、カナダの歴史学者ノーマンの『日本における近代国家の成立』を読んだときにちよつと内側からはこういうことは言えないな、こういうことはわからないといふうなことを感じましたね。しかし、不満はあるのですよ。ノーマンが日本の歴史家の観点といふのを、ある程度、借りてゐるのですね。そうしておいて、外側からの視点で日本を見るといふような。そうすると、今度は、ノーマンを見た日本の学者が、逆にノーマンの模倣をする。あるいはそれを評価するといふような、なんとも言えない、そういう関係があるでしょう。

江藤　あります。

吉本　そういう関係というのが、不満として最後に残つてくるわけですね。そうすると僕らの発想では、そんなのはいらない、外側の視点からではなしに見ようじゃないかといふふうな、意識的に拒絶するふうになつちやいますね。そこところが拒絶できるような無知の強さというか、世界を知らない強さか弱さか知りませんが、そういう特権でもつて押しつていこうといふふうになりますね、どうしても。

史料の選択

吉本 ところが江藤さんの場合には見ちゃったものということが、たえず問題になってくるところが、やはりいちばんおもしろいと思いますね。江藤さんの論文について堀田善衛や松本清張が「文学界」の文芸時評でなにか言っていますね。堀田善衛の場合には、林羅山のつかまえ方が恣意的であるというし、それから松本清張の場合には、史料的に言ってそうならない、あなたの描いていたような上野の山、つまり、忍ヶ岡の山があって、湯島の高台がこうあってというようなことは、実際はそうならないということなんですけれどもね。江藤さんはそういうことはどうでもいいのじゃないですか。つまり恣意的なイメージでいいわけなんじゃないですか。そうでもないですか。

江藤 恣意的ではないでしよう。

吉本 芸術になっていけばいいというわけでもないわけですか。つまり自分のイマジネーションで、そういうふうになつていけば、それでいいのだ、たとえば林羅山が客観的、あるいは実証的に言つてこうなる、こういう解釈ではこうなるということはどうでもいいのでしよう。つまり羅山の思想があり、そうしてそれに感応する江藤さんの思想があ

り、そうすればいいというのでしよう。どうせそういう史料は三等史料だと思いますが、忍ヶ岡がこうなっているとしようなことは、実際どうであったかはわかりはしない。しかしそれが江藤さんにイマジネーションとして、論の一つの色彩をあたえるというふうになれば、それでいいというように考えているのじゃないのですか。

江藤 それはイエス・アンド・ノーでしよう。私のものの感じ方のくせかも知れませんが、だいたい処女性に嫌いなんです。必ず相手に挿入されてないとだめなんで……ちょっと譬えが下品になってしまったな。(笑) 比喩を変えれば、つまり柔道でいえば、一回ころばされて……どっちも同じことだな、これは……(笑) 相手を投げる、そういう、回転運動の感覚がないと、自分のイマジネーションがもう一つ地につかないような気がする。つまり僕は他人を認めるのですよ。そのために、実証性が欲しくなります。ものの手ざわりを手がかりにして他人にふれるのですから。ただ史料の価値というものはあくまでも相対的なものです。AからZまでの史料をこごとく渉猟しても、史料のなかにすでに矛盾があるから、結局自分のイマジネーションがものをいうことになります。それによって史料の選択が行なわれているわけですからね。だから絶対に客観的な過去の復元は、実はあり得ないわけです。だが一方自分の

主観的なヴィジョン、イメージーションが、他人と共有できるものになるためには、そういう史料に触れた手応えがなければならぬでしょうね。それが他人との通路になるわけだから。ただ松本さんの場合は、私の論旨を問題にせず、自分の史料は絶対に真実で、私のほうではないと言うのですから、次元の違う議論になります。

ご承知のとおり、私はあそこで江戸の都市化と儒学のプレステイジの高まりの間に関連があったはずだということとを論じているのですが、松本さんの議論はこのことに少しも触れていない。たとえば寛永九年に「筋違橋」があったかどうかという。この橋が「筋違橋」とよばれたかどうかについては定説がないが、橋はたしかに存在していたのです。松本さんが寛永十三年といっているのは「筋違橋門」の間違いでしょう。この御門が出来たときすでに「筋違橋」という橋があったことは、「徳川実紀」の寛永十三年正月八日の項に明記されていますから、松本さんが「筋違橋」は享保以降の称だと言うのも間違いです。が、ここで問題なのは、すでに中仙道と江戸の接点になる交通の要衝が何と呼ばれたかについてすら諸説があって、その一つを絶対化することはできないということです。しかも松本さんは現在の東京のイメージを過去に投影してものを言っている。しかし本郷・駒込に寺がいくつあっても、大名の下

屋敷があっても、江戸の外縁はあくまでも外縁です。当時の江戸の概念から言っても、私の論旨から言っても、都市の内部ではなかったことになる。事実を作者のイメージから切りはなして論じられるわけがないのです。事実——ファクトという言葉はもとも「つくられたもの」という意味ですからね。つくるのは誰かと言えばそれにふれた人間でしょう。松本さんの議論は史料の相対性の感触を知らない人の、単純な見当ちがいにすぎません。

一方羅山について言えば、私は、秀吉の朝鮮の役の結果、むこうから流入してきた文化的な影響のことをもう少し考えてみたい気がするのです。朱子学といっても、朝鮮を経由してきている面が、非常に多いのですね。朱舜水のように、直接明からきたものもあるが、朝鮮経由の思想として入っているという傾きが強い。これは大事な因子だと思います。だから、このへんを補いたいという気持があります。つまり日本の文化には横からも前から、外からの力が加わっていて、いろんなあとがついている。しかしそれは空気の抜けかかったゴムまりのように、しばらくたつともとのかたちに直る。直るからこそ、われわれの文化の持続が生れて、結果として、全体として見るときに、やはり独得の形を描いていることになるのだと思う。

それだけのことをやってみないと気がすまない。僕には

どうも外のことは知らんというふうな、思い切り方はできなくなっていますね。吉本さんなどは、『言語にとって美とはなにか』での立論を見ても、余計なものほとんどん切ってしまった。たとえば新感覚派でも、そこに及ぼされた西欧文学の影響は全部切り捨ててしまつて、作家の意識と当時の日本の現実だけからその二つの函数としてあの文学現象をとらえようとされる。あなたの表出論、あれはおもしろい考え方だと思ふけれども、僕はああいふものを見ていると、どうしてもあなたが切ってしまったものが氣になつてしかたがない。

吉本 ああいう堀田さんの時評とか、松本さんの時評を見て感ずるのですが、たとえば堀田善衛の『海鳴りの底から』などは、天草の乱とか、キリシタン史とか、よく文献を読んでもありますが、読んでいても構想力にはならないところがありますね。だからいくら描いても、最後には、天草の乱自体が、非常に単純なイメージになつてしまつて、講談にあるような、ヤアヤアと片つ方で名のりをあげると片つ方もまた名のりをあげて合戦するというような、そういうイメージになつてしまふ。戦争というものはそういうものかという気がすぐにわいてきます。松本清張さんの推理小説でも、一連のドキュメントでもおなじで、資料はよくあさつてゐるし、よく知つてゐるわけですがけれども、料理

の手際がよくないから事実には敗けてしまふということが出てくる。

そういう地点から見ると、江藤さんが恣意的に見えるというふうになるのですけれども、僕はそういうことはどうでもいいという発想になります。だから、江藤さんが、実証的な史料を媒介にしないと論が立たないというような場合には、ほんとうは、そうとう折衷されてきちゃうというようなことがあるのではないかと思うのです。つまり、実証性ということとはトコトンまでやつていくと、どうしようもなくなっちゃう。どれを選択していいかわからなくなっちゃうし、それから、ああいふ史料、文献などというものは、あまり信用できないと僕は思うのです。これは数年前のことでも信用できない。だから、ましてや、ということになつて、それは信用できない。最後は自分の選択力と構想力に頼ることになる。江藤さんと、小林秀雄をくらべた場合の違いを考えると、小林秀雄の場合にはどうでもいいというのが、ものすごく徹底していると思う。要するにおれのものでさえあればいいということに、ある意味ではなっていますね。江藤さんのは、そこに媒介項が入っている。なんか才能の質を考えると、かなり似ているのだらうと思ふけれども、しかしそれが時代の違いなんだらうかなという感想をもつんですが。

江藤 なるほど。どうでもいいと言ってしまったえば、上がりは非常にきれいに行きますね。ただ僕はやはり一種の相対主義者なんだろうと思う。その点で、どちらかと言えば漱石なんかに近いのかも知れませんが。どこか一つ風穴があいてないかためなんです。もちろん事実というものはあなたのおっしゃるとおり絶対的に信用できるものではない。ほんの数年前の、たとえば安保闘争についての資料を見ただけでも明らかです。いかに改ざんされているかがよくわかる。つまり、過去を再現することはそれを感覚的に体験した人間にとっても容易なことではない。だから、いわゆる事実というものがほんとうに動かされない真理であるのかのように言うのは、間違いですね。認識の問題として、それは間違いです。

ところが、われわれが史料に対するとき、なにを選択していいかわからないということは実はないのだと思う。われわれが史料を選択するやり方は、実はわれわれが日常生活していることと同じなんです。はじめから自分のイマジネーションに合わせて切り取るというのではないけれども、そこに必ず自分が史料と出会うところがあるでしょう。自分の姿勢いかんで出会う方が違うでしょう。そうすれば、無数の史料があっても、吉本さんが切り取るであろう史料は、吉本さんの歩き方できまってしまう。同様に私の歩き

方で史料の選択はきまる。ところが、ここにもものがあるのにもかかわらず、ないかのように通りすぎてしまうというなら、それは恣意的ということになる。恣意的な飛び方とこの歩きかたとの微妙な違いが僕には意味があるのでですよ。

幻想の共同性

吉本 そういうところが、小林秀雄と違うところだと思うのです。江藤さんは小林秀雄に比べれば、ずっと市民性というものがあると思うのです。小林秀雄の場合には、突きつめていけば、一種の達人的な職人芸になります。

江藤 そうですね。

吉本 江藤さんが時評でほめておられた岡潔との対談(『人間の建設』)があるでしょう。ああいうものを見てみると、ちょっと僕なんかついていくのに気苦労なわけですね。読んでいて非常に疲れるわけです。疲れるのはどういうところかなと考えてみると、二人とも、なんか自分の生理的な感覚、ないし生理的な倫理というものにひっかかっているところでは、ものすごくそこをほじくりまわすし、深いわけですね。そういう収斂の仕方は、ありうると思えますけれども、なにかが媒介項になるというようなことではないわけ